

国立科学博物館の標本セーフティー
ネット活動と全国的なセーフティー
ネット構築に向けて

国立科学博物館

松浦啓一

国内の自然史標本の歴史：戦前

- 国立の自然史系博物館はなかった。

国立科学博物館の前身であった東京科学博物館は存在したが、教育・普及活動が中心。研究やコレクション収集活動は活発ではなかった。

- 地方自治体や財団の博物館はごく少数存在したが、教育・普及活動が中心。
- 大学博物館もなかった。
- 自然史標本は主に大学の研究者が収集・管理。
- コレクション管理は個人ベースで行われ、公的な管理はなかった。

国内の自然史標本の歴史：戦後 戦前と比べると大きな前進

- 国立科学博物館に研究部が設置され、研究活動やコレクション収集・管理を重視するようになった。
- 地方自治体に自然史系博物館が設立され、研究活動やコレクション収集・管理も行うようになった。
- 大学博物館が設立されるようになった（例：東大総合研究資料館1966年）。
- しかし、依然として、自然史コレクションに関する国家的方針は策定されていない。

自然史標本を取り巻く環境の変化

- 地球環境や生物多様性の重要性が認識されるようになり、自然史標本の価値が認められるようになった。
- 自然史系博物館のコレクションのデータベース化が1980年代に始まった。
- 21世紀に入り、生物多様性情報に関わる国際データベースプロジェクトが活動を開始した：GBIFやEoL (Encyclopedia of Life)。

国立科学博物館のコレクションの現状

- 動物、植物、菌類、化石、岩石・鉱物、人類等の自然史コレクションと理工資料を所蔵。
- 登録標本は約400万点。未登録標本も加えると1000万点以上。
- 標本・資料統合データベースによって55のコレクション、約126万件のデータを公開。
- 国内及び西部太平洋地域で中核的コレクション。
研究面、コレクション収集・管理においてセンター的役割を求められている。
- 今年度中に新宿分館がつくば地区に移動。すべてのコレクションと研究部がつくば地区に集まる。

<p>動物研究部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 鳥類 ・ 海棲哺乳類 ・ 陸棲哺乳類 ・ 両生類・爬虫類 ・ 魚類 ----- ・ 棘皮動物 ・ 原索動物 ・ 原生動物 ・ 中生動物 ・ 扁形動物 ・ 曲形動物 ・ 袋形動物 ・ 甲殻類 ・ 有爪・緩歩動物 ・ ウミグモ類 ・ カブトガニ類 ・ 環形動物 ・ 刺胞・有櫛動物 ・ 海綿動物 ・ 触手動物 ・ 半索動物 ・ 軟体動物 ・ 毛類動物 ・ 有鬃動物 ・ 星口動物 ----- ・ 異翅目 ・ 不完全変態-他 ・ 脈翅目(広義) ・ 鞘翅目 ・ 双翅目 ・ 鱗翅目 ・ 膜翅目 ・ クモ目 ・ ダニ目 ・ その他のクモ綱 ・ 多足類 	<p>植物研究部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 維管束植物(標本) ・ 維管束植物(生植物) ・ コケ植物 ・ 菌類 ・ 地衣類 ・ 変形菌類 ・ 大型藻類 		
<p>地学研究部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 岩石 ・ 鉱物 ・ 植物化石 ・ 脊椎動物化石 ・ 現生骨格標本 ・ 無脊椎動物化石 ・ 水・堆積物・岩石 	<p>人類研究部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 遺跡出土人骨 ・ 化石レプリカ 	<p>理工学研究部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 理工学資料 	<p>附属自然教育園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生物季節観察データ

ページが表示されました

Internet

国立科学博物館の標本・資料統合データベース
126万件のデータを公開

> 標本資料センター

- ▶ 事業
- ▶ コレクションポリシー
- ▶ スタッフ
- ▶ アクセス情報

> 分子生物多様性研究資料センター

国立科学博物館のコレクションに關わる基本方針

平成 22年 10月 22日

部長会議決定

国立科学博物館のコレクションとは当館に保存されている標本・資料の総称である。当館のコレクションは自然史及び科学技術史に関する理解を深め、研究を推進するための公的資料である。コレクションは研究資料となると同時に、研究の結果を保証する証拠標本としての役割をもち、さらに、過去と現在の自然や人間活動の記録という性格を有している。したがって、コレクションを収集し、保管し、研究や展示、学習支援活動に活用し、次世代に継承することは当館の重要な使命である。

1. コレクションの収集

当館は日本で唯一の総合的科學博物館であり、収集すべきコレクションの種類は多岐にわたる。当館の収集対象となる主要なコレクションは生物や岩石・鉱物などの自然史に関する標本・資料や科学技術史に関する標本・資料である。コレクションの主な収集地域は国内及び東アジアから東南アジア地域、海洋に於いては西部太平洋である。

コレクションの収集は国内及び関係諸国の法令や規則を遵守して行わなければならない。生物標本や岩石・鉱物標本の収集に際しては、収集する環境を不必要に損なうことがないよう、また、個体群に大きな影響を与えないように配慮する必要がある。

コレクションを外部から受け入れる場合には、法令や規則に沿って収集されたことを条件とする。受け入れたコレクションは当館の活動に自由に利用できるものとする。

2. コレクションの保存

コレクションの保存方法は標本・資料によって異なるが、すべての標本・資料を良好な状態で保存しなければならない。コレクション管理担当者は標本・資料室の維持・管理に留意し、標本・資料を円滑に利用できる体制を整えなければならない。

コレクションポリシーの策定（2010年10月22日）

3. コレクションの利用

国内外の研究、展示、学習支援活動にコレクションを利用できるものとする。ただし、コレクションを利用できる者(機関)はコレクション管理担当者が認める者(機関)に限る。コレクションの利用に当たってはコレクション管理担当者の指示に従うものとする。なお、標本・資料の状態や保存数などによって、利用を制限する場合がある。コレクションの貸出、交換及び譲渡の方法は別途定める。

4. コレクションの廃棄

コレクションの中に甚だしい損傷を受けた標本・資料が発見された場合や採集情報などの標本・資料に関わる重要な情報の付与が不可能な場合には、当該の標本・資料の学術的価値は著しく滅失しているものと認められる。このような場合には、コレクション管理担当者は所定の手続きを経て標本・資料を廃棄することができる。

5. コレクション情報の公開

コレクション情報はデータベースなどを通じて公開することを原則とする。ただし、標本・資料の性質や管理上の事情によって公開する情報に制限を設ける場合がある。

コレクションポリシー
利用、廃棄、コレクション情報公開の方針も含む

国立科学博物館の標本セーフ ティ―活動

- 国立研究機関や大学、個人のコレクションを受け入れてきた。
- 過去10年間の受け入れ点数：約163万点。
- 主な機関とコレクション
 - 遠洋水産研究所魚類コレクション：約100万点
 - 斎藤報恩会自然史博物館コレクション：約16万点
 - 東京農業大学維管束植物コレクション：約15万点
 - 東アジア産ユスリカコレクション：約5万点
 - 筑波大学維管束植物コレクション：約5万点

斎藤報恩会自然史博物館コレクションの 受け入れ

THE SAITO HO-ON KAI FOUNDATION

The Saito Ho-on Kai was established in Sendai on the 30th of February 1923, with a capital of 3,000,000 Yen, which was offered for the public good by the late Mr. Zen-emon Saito of Maeyachi, Moma-gun, Miyagi Prefecture. For the establishment of the foundation application was made with the relevant Government offices, and with their approval the Foundation was established with the following objects:

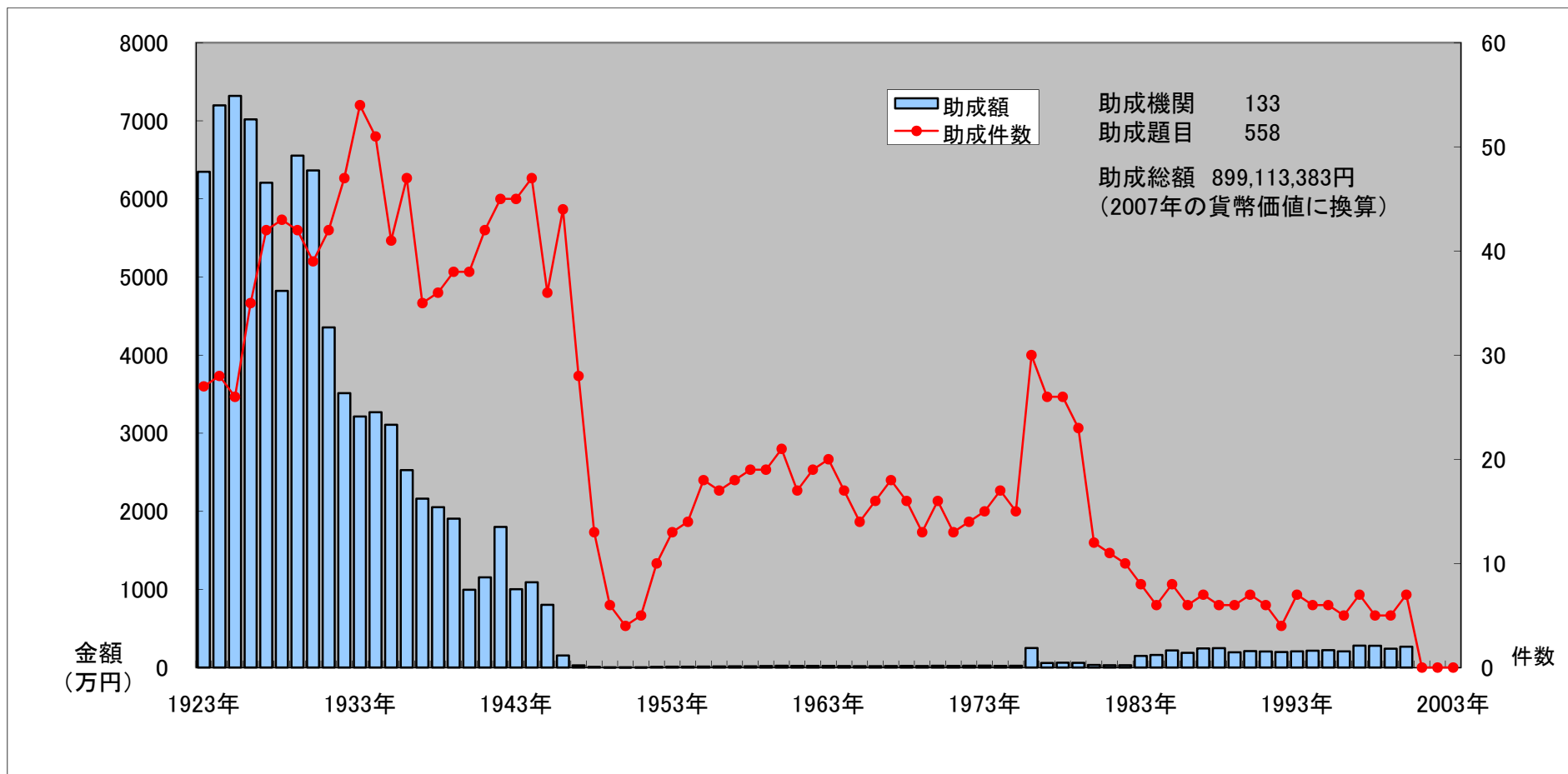
1. Aid for industrial development.
2. Aid for industrial development.
3. Aid for social improvement.



旧斎藤報恩会館



斎藤報恩会自然史博物館



齊藤報恩会による学術助成

公的な学術助成金は戦前、少なかった

齊藤報恩会の学術助成によって様々な分野の学術が発展した



八木・宇田アンテナ

斉藤報恩会コレクションの特徴

- 日本の自然が良好な状態に保たれていた1930年代に採集された標本が多い。
- 東北地方6県から集中的に採集されている。
 - 6県から広く採集するため組織的な調査が行われた。
 - 採集者には当時の中学校教諭など、地方の自然に詳しい人たちが選ばれていた。
 - 採集方法などを示した「斉藤報恩会時報」が出版された。
- コレクションの総点数は16万点を超える。
- 新種のタイプ標本など貴重な標本が多数含まれている。



1930年代に品井沼で採集されたシナイモツゴの標本



斎藤報恩会自然史博物館の液浸標本



齊藤報恩会自然史博物館の魚類標本



齊藤報恩会自然史博物館の鳥類本剥製標本



齊藤報恩会自然史博物館の鳥類仮剥製標本



移動のため1階に並べられた哺乳類本剥製標本



移動のため梱包された液浸標本



標本運搬のため21台の大型トラックを使用
仙台から東京まで2006年2月に移動



企画展「東北の自然史」 斎藤報恩会コレクションの展示



企画展「東北の自然史」

標本セーフティネットと自然史系 博物館館長懇談会

自然史系博物館に関わる様々な課題を検討

- 国立科学博物館
- 茨城県自然博物館
- 千葉県立中央博物館
- 群馬県立自然史博物館
- 神奈川県立自然史博物館
- 滋賀県立琵琶湖博物館
- 大阪市立自然史博物館
- 兵庫県立人と自然の博物館
- 北九州市立自然史・歴史博物館

自然史系博物館館長懇談会における 検討

- 昨年、標本セーフティーネットを科博から提案。
- 標本セーフティーネット活動に関する基本的了解を得た。
- 事務局は科博が担当。
- 標本セーフティーネットを具体化するためには様々な課題があるため、ワーキンググループを作って検討する（例：受け入れのための基準は？ 何でも受け入れる事になるのは困る）。

標本セーフティネット構築の上で 留意すべき事柄

- 博物館及び研究員・学芸員のネットワークが重要（全科協、S-netやNPO西日本など）。
- コレクションを受け入れるためには事前の情報収集が必要。そのためには博物館が信頼を得ていなければならない。
- 標本は公的な性格を有するので、博物館に入れば個人所有から離れる。
- 国内の自然史コレクションの現状を把握するためメタデータベースを構築する。まず自然史系博物館から開始する。大学も参加して欲しいが、分類学会連合等のしかるべき機関が担当することが合理的。

国内の自然史系博物館のコレクション情報の整備

- 電子化されていないコレクションの情報が必要。
- どのような標本がどれくらい国内にあるのか誰も知らない。
- 電子化されていないコレクションのメタデータベース作成を進めなければならない。
- 全国の自然史コレクションの全貌が把握できれば、研究面やコレクション管理の点で大いに役立つ。
- メタデータベースを構築できれば、それぞれの博物館のコレクションの特徴を把握できる。

おわり

自然史博物館＝コレクション